

このたびJYMAでは、本来の活動は遺骨収容・慰霊巡拝・国際交流であるものの、今般の国難的な未曾有の天災に際し、過去にインドシナ難民救済や、ソロモン諸島サイクロン禍への救援物資送達等の社会活動を経験した経緯から、理事会で支援活動実施を決定し、急速、支援者の方々にも支援や助言を賜り、はじめて災害被災地派遣を実施いたしました。



東北関東大震災被災地八ヶ所へ
三次・七千食の炊き出し支援を実施!



給仕する隊員

避難所の皆さんの笑顔のために



その場で料理する

避難所の子供達と遊ぶ隊員

発行所
特定非営利活動法人
JYMA日本青年遺骨収集団
〒102-0076 東京都千代田区五番町2
番町バレス303号室
TEL03-6268-9939
FAX03-3239-0109
URL : <http://www.jyma.org>
e-mail : info@jyma.org
発行人 山口 美朝
編集人 瀬尾 昌平

東北・関東を襲った大地震から一月以上が経過したが、現在でも余震は頻繁に起こり、東日本では不安を抱えながらの生活を余儀なくされている。復興作業も少しずつ進んできてはいるが、未だに新たな住まいを確保できない人々も多く、その爪痕は深く残っている。

今回の災害派遣実施では、当法人参加隊員の多くが、被災地での活動は初めての経験であり、不安を伴った派遣だったが、友好NPO団体のIVUSAのアテンド、ASTEOの職業調理師の差遣支援があり実現し、無事に所期の目的を達成することができた。

また、派遣隊員は、余震や福島第一原発事故の影響が憂慮される中、両親の許可、各々の意志、並びに身体状態等を深く配慮し、志願により災害派遣隊に参加してくれた。中には全日程に参加する猛者もいたほどであった。連休中は非組織ボランティアが多数現地入りすると思われる、今後は、被災地の自助力を支援する活動に移行していき被災地の一日も

早い復興を願うものである。

JYMA災害支援派遣活動指針

目的

東北関東震災により、壊滅的被害を被った被災地において、単調な避難所の配給食を余儀なくされている被災者へ、心身ともにホッとすることや暖かい食材を、その場で調理して無償提供し、その他不解消のための一助となる活動をすることを目的とする。特に、食事や睡眠、生活の一切を狭い被災所で過ごしている方々へ、簡易テーブルなどを活用し、野外に出て気分転換をして貰う事を企図する。

救援先の定義

- (1) 災害派遣地域は、原則として壊滅的被害を被った地域とする。
- (2) 対象は主に、地震による津波で仮設住宅が出来るまで、避難所暮らしを余儀なくされている人、ならびにライフライン途絶の為に炊事に難渋している在家被災者達とする。

支援方法

- (1) 暖かい食材の調製・配給・炊き出し
- (2) お年寄りの話し相手、子供の遊び相手等、何らかの安らぎに関するケア
- (3) 簡易シャワーテントを活用してのシャワー・沐浴サービス

支援概要

第一次石巻派遣隊

(四月八〜十一日)

派遣活動地

宮城県石巻市大街道地区街頭
宮城県石巻市大橋地区街頭

(三千食完配)

- ・参加者 赤木衛/井上達明/安達俊一/渡邊志津加/湯原康元/山崎志真/藤村千佳/小田周/北村徹/佐々木慎吾/中村茂/中村貞治/野沢仁/岡元孝司/会田雄一郎/会田有希/宮崎猛志/山崎努

第二次気仙沼派遣隊

(四月十六〜十八日)

派遣活動地

宮城県気仙沼市小泉中学校避難所
宮城県気仙沼市松岩小学校避難所
宮城県気仙沼市本吉広域防災センター避難所
宮城県気仙沼市松岩公民館避難所

(二千食完配)

- ・参加者 赤木衛/渡邊志津加/山崎真大/藤村千佳/黒田翔太/石川涼太/馬場宏和/五日市萌々子/浅野夏子/栗原小織/會田雄一郎/岡本考司/佐々木慎吾/野沢仁/鈴木孝史/江川英司/岩増弘典

第三次岩手派遣隊

(四月二十〜二十五日)

派遣活動地

岩手県釜石市
岩手県下閉伊郡山田町

(二千食完配)

- ・参加者 赤木衛/小田周/五日市萌々子/山中亮/渡辺聖子/佐藤亮太/佐久間貴文/石坂龍門/渡邊志津香/山崎志真/齊藤正人/野沢仁/小西宏一/岡本考司/岩増弘典/前村絹代

被災地支援活動を終え



国士館大学四年 渡邊 志津加

右も左もわからない今回の派遣。危険と隣り合わせのため人員募集や準備などもスムーズには進まず、少なからずの不安のなか出発した。一日目は生憎の雨の中の活動。該地に近づくと、今回の震災の悲惨さを目の当たりにした。「私たちが出来ることを精一杯しよう」と心に決め、

各自が自分の長所・個性を發揮して設営から運営までやりきった。二日目は青空の下で活動できた。日曜日ということもあり、沢山の被災者の方々が足を運んで下さった。「ありがとございます」と笑顔で言われて、こちらが勇気付けられた。被災者の方とお話しする機会もあったが、「普通の生活」に戻るまではまだまだ時間が掛かることが予想された。私自身 七・一三新潟の水害や

中越地震を経験し、恐怖感や不安感など共感できるところもあり、それらを少しでも取り除き「ほっ」としていただけたらと思った。全体的に前日よりいい動きが出来たのではないかと思う。

同じ目的意識を持った人が集まると初対面でも一つにまとまり、課題を達成できる。全体を通し、十六人というメンバーで達成することができ、無事帰京でき安堵した。そして、今回の派遣で「人間の素晴らしさ」を改めて感じる事ができた。

ただ、人員不足でJYMAが計画していた、シャワーサービスや子どもケアなどが十分に出来なかったことが心残りである。新たに見えた課題を次回以降で改善していきたい。

第二次、第三次隊員の参加所感につきましては次号にて掲載いたします。今回の被災地ボランティア派遣実施に際し、ご支援ご協力頂いた方に対して、当法人一同深く御礼申し上げます。



JYMA新企画 『勉強会』スタート

今年から、当団体では『勉強会』という名の新たな企画が催されている。

今日までに計四回が開催されており、学生を中心とした参加者が遺骨収集に関連する事柄を学んできた。

今回はその『勉強会』についての詳しい内容を、平成二十三年度の学生代表である山口美朝代表に尋ねた。

「ずばり、この『勉強会』の目的とは？」

「今までJYMAでは遺骨収集を主な活動とし、併せて史実の勉強や戦友、ご遺族の思いを考えることも目的としていました。」

「今度は派遣やその直前に行われる勉強会のときだけでなく、定期的に日本史のことや戦争のことを学ぶ場、慰霊について考える場があったらいいなと考え、毎月の勉強会を行うこととなりました。」

「開催日や開催地などは決まっていますか？」

「開催日は毎月下旬の土曜日を使っています。」

「千鳥ヶ淵戦没者墓苑の会議室をお借りしたり、靖国神社の靖国会館の一室をお借りしたりと場所はその都度変わっていますが、ゆくゆくは固定していきたいと思えます。基本的に市ヶ谷、九段下の近辺で定期的に行っていきます。」

「HPにてお知らせしているのので、チェックしていただけだと思います。」

「具体的にどのような内容を扱っているのでしょうか？」

「第一回からおさらいしてみると、第一回『大東亜戦争と南方慰霊碑について』、第二回『派遣の心得』、第三回『戦没者と慰霊について』、第四回『JYMAの活動と今後について』という題目で勉強会を行ってきました。」

「今後は第四回の内容を当法人の説明会と位置付けて定期的に開催し、勉強会では一般の方も興味のあるような話題を扱い、様々な分野で活躍されている講師の方をお招きしたいと考えています。」

「今後の課題などありますか？」

「課題としては、この勉強会がJYMAだけのものでなく、支援者の方や一般の方も気軽に参加できる行事として確立させられるかという点です。戦友の方やシベリア抑留経験者の方、またご遺族の方との交流の場としても活用することができたらなと思っています。」

「ありがとうございます。頑張ってください。」



第三回勉強会の様子

東日本大震災により被害を受けられた皆さまに心よりお見舞いを申し上げますとともに、JYMA諸君の被災地支援活動を応援します。

靖国神社に参拝を

意見広告



私達は、総理・閣僚らが靖国神社に国家・国民を代表して感謝の誠を捧げる事を求める国民運動を推進しています。

英霊にこたえる会中央参加団体 旧戦友連 代表 佐藤博志
〒230-0017 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾中台8-6 TEL&FAX : 045-571-6965

緊急投稿

ソロモンの小石



西富 謙太郎 (社会人)

今、被災している。

私の住む茨城県南での被害は軽微とはいえ、ガソリンの不足、食料品の不足で普段の生活が困難な状況です。福島では放射能が漏れ近隣の県に被爆の恐怖を与えています。大きな余震が未だに続いています。

私は仮設住宅の仕事をしており「福島に行く」と言われた時はさすがに顔から血の気が引くのがわかりました。しかし、自分は今、物凄い闘志とも恐れぬほどの勇氣があります。

ソロモンで日本軍の闘志と不屈の精神を学びました。先輩方の物凄い攻撃精神、投降より餓死を選び、散ったその誇り高き戦士達に敬服し、己の自分勝手な考え方や

男としての生き様など根本的に見直す必要があると確信いたしました。

私はガ島の一木支隊の海岸で小石を一つ拾って大事に持ち帰りました。一木支隊はガ島に来る前はグアムに居たことがあり、私も以前グアムに数ヶ月居たことがあるので親近感をもっていました。

その石は赤と白が混ざった不思議な感じの石で、海岸の中で一番先に目に付いたので運命的なものを感じたのです。

無事に日本へ帰国してすぐ祖母が亡くなったと連絡があり引渡式が終わるとすぐ祖母の元へ向かった。団服のままで火葬場について祖母は骨になっていた。

「自分が骨を拾いに行つて帰ってきたら身内が骨になっているとは思わなかったよ」と言ったら母が涙目になり乍ら力無く笑った。

私は二月に引越しをしており、その準備で急いで自宅に帰って荷物を整理している矢先に地震に襲われた。今まで経験した事のない

大きな揺れだった。私の自宅付近は塀が倒れ、瓦が落ちたがガスと断水だけですんだ。

そんな事で石の事はすっかり忘れていた私は石を取り出し手に取り、次々に押し寄せる試練を越える力を下さいと祈ったのでした。

この様に私の人生はソロモンから確実に変わり始め、私自身の戦いも始まった。

この国難を打開するのは我々の使命であり今こそ日本人の不屈の精神で新たな日本を作らんとソロモンの石に誓うのでした。

JYMA学生諸君、今後も厳しい日々が続きますが、君達の情熱がこれからの日本国を作るのです。国難を乗り越え富国強民ならん事を祈ります。



新アカウント「JYMA学生の声」

当団体にはWEB上において皆様へ情報を発信するツールとして公式HPの他にtwitterを利用しています。この度公式アカウントの他に、学生用のアカウントを新たに作成しました。『学生の生の声』@jyma_publicityをお聞かせできるいい場なので、twitterを利用していただける方には是非フォローをしていただきたいと思います。

お詫びと訂正

前号(遺烈百三十三号)七面に掲載しました、笹原千佳の沖縄派遣報告文ですが、正しくは藤村千佳の報告文でした。皆様に誤った情報をお伝えしてしまつたことを深くお詫び申し上げます。

経 験



藤村 千佳 (日本大学三年)

遺骨収集によって 伝えられること



笹原 千佳

(日本大学三年)

遺骨収集は今後も続けて行くべき活動であると考えている。それは、私の中に戦争を忘れず後世に伝えていくという思いと、戦争が終わり平和の訪れた地上に御遺骨をお迎えしたいという個人的な、いわばエゴイズムの考えがあるからである。感情を理由に土に埋まっている御遺骨を掘り返すことは自然の摂理に反している行為という考え方もあるかもしれないが、私は感情を持つ人間に生まれた以上、感情のままに生きることもまた自然の摂理だと考えている。亡くなってしまった人の声も未来を生きる人の声もわからない現在の私たちが出来ること、遺骨収集を通じて戦争を伝えることだと私は思

う。それは私自身が遺骨収集によって戦争を深く考えることが出来たという体験があるからこそ強く思うのである。私はそれを遺骨収集の意義だと考えている。

沖縄派遣に参加する以前の私は、戦争は遠い話と感じ、遺骨収集が現在まで行われていることの意味すら考えたこともなかった。それどころか、遺骨収集と聞いて真っ先に思い出したことは首相の靖国神社参拝が国際的に問題となったニュースであった。私は自分が国際的な問題となるような事柄に巻き込まれたくないと思っていたのだ。そんな私が沖縄派遣に参加した理由は自分が学生であったからこそだと思う。自分の中で遺骨収集の善悪を判断することは出来ていなかったが学生のうちなら何をやっても許されると考えていたのと同時に、様々な知識を得る等貴重な体験を試してみたかったのだ。その結果として、参加をして非常に多くのことを得ることが出来た。最初に、この派遣を通じて戦争

を以前より身近に考えることが出来たことが挙げられる。壕の中へ入ったこと、戦争孤児の方のお話しを伺えたこと、遺品の数々を見ることができたことから当たり前ではあるが本当に戦争が起きていたことを改めて感じた。極めつけは最終日の平和祈念公園にて祖父の実家のある県の慰霊碑に自分の名字を見つけたときだ。これにより更に他人事ではないと思ったのだ。

次に、遺骨収集の意義を真剣に考えることが出来たことである。現場に向いての作業や、様々な立場の方々から意見を伺えたこともさることながら、毎晩のミーティングで派遣仲間と話し合うことが出来たことで冒頭に述べたような自分の考える意見を持つことが出来た。

最後に得ることが出来たと考えているものは、派遣の仲間である。ほぼ初対面での一週間以上に及ぶ集団生活において遺骨収集に取り組みことの出来た仲間は、皆温かく優しい人ばかりで本当に恵まれた環境であったと感じている。人

間はこんなにも温かい心を持っているのに何故戦争が起こってしまったのかが不思議で仕方なくなってしまう。逆に言えば、大切な人々を守るためには人間は戦争をもちこしてしまうのだとも言える。今回の派遣は、「日本人の学生が日本人の御遺骨を収集する」というものであったがこれが国境なく「学生が御遺骨を収集する」というものであれば、さらに広い視野と心を養えるのではないかと考えることも出来ると思う。そのように遺骨収集を通じて平和を広げていくことが出来れば、戦争で亡くなってしまった方々の「自分の身内を守りたかった」という思いを無駄にしないように出来るのではないだろうか。

沖縄派遣の最終日のミーティングで沖縄の学生との合同収集を今後においてぜひ実施したいと話をしていたが、そのような機会をつくり上記で述べたような平和を広げていければ幸いである。

このような機会を設けて頂き本当にありがとございました。

マリアナ諸島 自主遺骨調査派遣実施!! 十三柱の御遺骨が 確認される!!

去る平成二十三年二月二十四日から三月二日の期間、当法人はマリアナ諸島における御遺骨の残存状況を確認するべく、自主調査派遣を実施いたしましたので、ここに御報告させていただきます。

参加隊員

- 赤木 衛 JYMA理事長
- 井上 達昭 JYMA理事
- 外部協力者
- 伊藤久夫妻 南興会

調査目的

- 一、マリアナ諸島サイパン、テナアン両島における遺骨残存状況を把握する。
- 二、発見された御遺骨の帰還に係る関係部署、手続、連絡経路の確認
- 三、現地における情報入手手段、連絡体制の確認

四、サイパン、テナアン両島における慰霊碑の管理状況、破損状況の確認

調査日程及び結果

- 二月二十四日 成田空港出発
- 二月二十五日 テニアン着。現地協力者の方と打ち合わせ。戦没日本人慰霊碑参拝及び慰霊碑内に仮安置中の御遺骨を遺留品と共に確認(一柱)。市長表敬訪問。住吉神社付近遺骨発見現場にて御遺骨を遺留品と共に確認(一柱)。
- 二月二十六日 IBB(無線塔)付近遺骨調査。カステイユ遺骨調査。遺留品と共に御遺骨確認(一柱)。スーサイド・クリフ遺骨調査。数か所にて御遺骨確認(三柱と散在した数柱分)、カロリナスハイツ遺骨調査にて御遺骨確認(一柱)。
- 二月二十七日 カロリナス洞窟遺骨調査。鍾乳洞内にて御遺骨確認(一柱)。小川砲台遺骨調査。集骨後の残骨と思われる

る御遺骨確認。テナアンからサイパンへ移動。

二月二十八日

スーサイド・クリフ慰霊碑調査。カラベラ千人洞窟遺骨調査。中部太平洋戦没者の碑参拝。パシフィックイーグル・エンタープライズ松本氏と面談。

HPOのロニー・ロジャース氏と面談。オブジャンビーチ砲台跡調査。ラウラウ洞窟調査。ガラパン慰霊碑等調査。

三月一日

サイパン発。

情報収集結果

今回の派遣では、御遺骨の調査と共に現地の方や関係団体の方との面会も行った。テナアン市長のテラクルス氏は、島内で発見される戦没者の御遺骨に自身の痛みを感じ、今後もできる限りの協力をしたいとお言葉をいただいた。昨年十月に発見された御遺骨の、厚労省への引渡しを手配したウィリー松本夫妻は島内慰霊碑の維持管理もしており、損傷の激しい慰霊碑の修繕も近々行いた

いとのことであった。

現地で考古学法に基づいて御遺骨が日本人のものを確認している北マリアナ政府歴史保存局(HPO)のロニー・ロジャース氏とも面談を行い、現地の遺骨収集、調査、引き渡しの現状を伺った。

テナアン島の各慰霊碑は良く管理されており、沖縄県慰霊碑にのみセメントの劣化による破損が確認できた。一方、サイパン島の慰霊碑管理状況は良いものとは言えず、悪戯による破損も多い。今後の継続調査が必要とされる。

現地連絡体制としては、テナアン島でツアーガイドをしている枝村氏、同じくツアーガイドのミツエ・エバンヘリスタ氏、高校日本語教師の佳子・マンゲローニヤ氏との交流ができ、今後についても意欲的なお話をいただいた。

御遺骨の存在が確認された以上、一刻も早くお迎えにいくなさる。併せて、慰霊碑の修繕事業にも力を入れていく必要がある。

(文責・井上)

各部署長新任挨拶

【派遣管理部】



吉田 良子
(青山学院大学四年)

派遣管理部の吉田良子です。派遣はJYMAの主要事業のひとつであり、派遣隊員を選出する派遣管理部は非常に重要な部署です。

多くの仲間たちに派遣という貴重な経験をしてもらうべく、派遣前に行われる勉強会などの細かい部分までしっかりと取り組んでいきたいと思っています。また他の派遣管理部のメンバーと協力し、互いがより効率的に作業をできるよう努め、JYMAを支えていけるよう尽力していこうと思います。これから一年間宜しくお願いいたします。

今年度派遣管理部を担当することになりました古屋沙知です。派遣管理部の仕事は大変だと聞いていて不安がなかったら嘘になります。まだ仕事らしい仕事はしていないし、どのくらいの時期にどれくらい忙しくなるのかもわかっていません。それでも精一杯努力し、もう一人の派遣管理部長である吉田と協力していきたいと思っています。派遣に参加される方々が万全の準備ができて安心して現地向かえるように様々な面でサポートできたらと思っています。今はまだ右も左もわからない状態ですが、来年度の引き継ぎの際には、派遣管理部であったことを誇りに思えるように努めてまいりますのでどうぞよろしくお願いします。

【派遣管理部】



古屋 沙知
(日本大学四年)

【行事管理部】



浅野 夏子
(拓殖大学四年)

今年度行事管理部を担当することになった浅野夏子です。

私は沖縄派遣に参加したことをきっかけにJYMAに入りました。行事管理部の仕事は、みんなに行事があることを伝え、その募集をすることです。多くの人にいるような行事に参加してほしいと思っています。

今年度はみんなが情報を共有することを目標に活動しています。これからは今まで曖昧になっていたこと、また返信率の悪さを改善していきたいです。

どんな理由でもまずは参加することが大切だと思います。多くの人に参加していただき、またみんなが活動しやすいよう支えていけるように頑張ります。よろしくお願いたします。

今年度より情報部を担当いたします藤川竜馬と申します。昨年度は戦史検定の情報処理部に所属しておりました。

今回情報部に配属が決まり、昨年学んだ事を生かしていく所存です。

情報部での私の今年度の目標は「今ある情報の整理ときちんとした体裁の中で少しでも利用しやすいこと」です。まずはやるべきことの把握と、現在取り扱っている情報を整理したいと思います。

情報部に配属されまだ日が浅いため、まだまだすべての仕事を把握できているわけではありません。支援をしてくださっている皆様にご迷惑をおかけするかもしれませんが、自分のできることを誠心誠取り組んでいきますのでよろしくお願いたします。

【情報部】



藤川 竜馬
(拓殖大学四年)

【広報部】



瀬尾 昌平
(学習院大学四年)

今年度の広報部を担当することになりました瀬尾昌平です。

広報部は、遺烈の編集を始め、当団体の活動を皆様にお知らせする際の最重要ポジションと認識しております。

その広報活動において、私が重視しているのは、速やかで確実な情報の伝達です。遺烈だけではなく、HPなどを有効活用し、少しでも早い情報提供をしていくことが目標です。

現在遺烈の編集に携わっておりますが、まだまだ半人前の状態で、地に足もついておりません。最初は御迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、一刻も早く与えられた仕事を確実にこなせるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度渉外部を担当する事になりました高橋孝征です。

派遣の際には現地で御遺族の方々や支援者の方との作業を通じて普段の生活では感じる事の出来ない素晴らしい経験をさせて頂きました。

派遣とは学生にとつて大きな経験の場であり、成長の場です。

しかし私たちだけで派遣を行うことは決してできません。派遣を行うためには多くの方のバックアップが必要不可欠です。

そこで支援をしてくださる皆様と学生との距離をより身近にするための仲介役を担う部署にしていきたいと思っております。渉外部は今年度新設された部署ですので、何かと不手際もあるかとは思いますが、出来る限り頑張りますので一年間よろしくお願いいたします。

【渉外部】



高橋 孝征
(拓殖大学四年)

総会のお知らせ

日時：平成二十三年五月二十九日(日) 十三時より

場所：特定非営利活動法人 ジエイワイエムエイ事務所 東京都千代田区五番町2番町パレス303号室

主な審議事項

- 平成二十二年事業報告
- 平成二十二年決算報告
- 平成二十三年事業計画
- 平成二十三年度予算
- 平成二十三年度理事選出

「特定非営利活動法人(以下NPO法人)」は、平成十年に施行された「特定非営利活動促進法(以下NPO法)」に則つて認証された非営利団体のことで、通常の法人(営利法人や学校法人等)と同じく様々な運営義務が課せられています(納税義務や関係機関への登記義務、年度末の報告義務等)。また、法人組織としてNPO法人の代表権を持つ役員、その団体の構成員としての社員がおかれ、必要に応じて事務機関をおくことができます。NPO法人が指す「社員」とは、「社団法人」が言うところの「社員」と同義であり、NPOの活動目的に賛同し、且つ自らの意志で参加する会員を法律上「社員」と呼びます。

NPO法人であるジエイワイエムエイは、団費を支払った学生団員はもとより、ご賛助を賜った皆様全てが会員であり、NPO法上の「社員」となります。この「社員」の方々は、NPO法で年1回以上の開催が義務づけられた、最高意志決定機関の「総会」へ出席する権利があります。なお欠席された方々の議決権は議長に委任いたします。

編集後記

今年は去年に引き続き寒い春となっている。そのことを一番感じているのは、私たちではなく被災地の方々であろう。一刻も早く春らしい春になることを祈るばかりだ。また去年は夏が非常に暑かった。それを鑑みると、夏の電力不足は避けられないだろう。東電は現状では夏に向けて電力の確保はできると予測しているが、どこまで信じていいのかもわからない。国民はその甘い言葉を鵜呑みにせず、今からでも節電の習慣をつけるべきであろう。(瀬)

戦史検定のプログにて井上事務局長が「今被災地で活躍している自衛隊員と六十六年前の兵隊さんは同じ気持ちで頑張っているのでは」と書いていた。同意見だ。辛くても危険でも家族がいても、母国のために立ち向かうその思いは、戦時中の兵隊さん達にもあった。嫌でも立ち向かった。それが任務だった。そう思うと、我々も一丸となって、この事態に立ち向かうべきであろう。被災地の一日も早い復興を願つ。(美)